
恐くない幽霊

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐くない幽霊

【Nコード】

N8104A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

ある日、僕は幽霊を見た。その幽霊は、柳の下にいかにも幽霊です！という格好で佇んでいた。どこをどう見てもちつとも恐くない。その幽霊が、僕に頼み事をしてきたけれど……。

その幽霊を見たのは、川沿いの柳の下だった。柳の下に幽霊だなんて、あまりにベタ過ぎやしないか？ それに、その幽霊ときたら、白い着物を着て白い三角巾までしていた。もちろん、足はない。黒く長い髪をたらし、両手はお決まりの幽霊のポーズで、胸の前にダランと下げていた。これで『うらめしや』なんて言ったら、ぶん殴ってやろうかと思った。

あまりに人間を馬鹿にしている。

僕は今までに何度も幽霊を見ている。だから、幽霊を見たってちよつとやそつとじゃ驚かない。最近の幽霊は人間とほとんど変わらない。たまにゾツとするような幽霊を見たりもするけれど。そういう幽霊は、かなり怨念が強い。取り憑かれるとまずいから、なるべく近寄らないようにしている。

この幽霊は、今まで見た幽霊の中では最低レベルだ。ちつとも恐くない。

僕は彼女を無視して、柳の木を通り過ぎようとした。

『あ、あの……』

蚊の鳴くような声で、女の幽霊は僕を呼びとめた。

『あのー』

聞こえないふりをしてると、もう一度声をかけてきた。それでも無視して通り過ぎようとしたら、幽霊は僕の後にスツと近寄ってきた。

「なんだよ！」

僕はムツとして振り返る。幽霊はヒエツと驚いて後ずさりした。

幽霊の方がビクリしてどうする。

『……』

幽霊は黙って俯いた。泣きそうな顔をしている。

『私、恐くないでしょうか？……』

「は？ 全然！」

僕は、キツパリ即答した。

「今時、そんな古めかしい幽霊っていないぜ。お化け屋敷にもいないんじゃないのか？」

『やっぱり……』

幽霊は、はぁーと深くため息をついた。その暗さだけは、幽霊っぽい。

『私、死んでかれこれ二百年近いんですけど……誰も怖がってはいられないんです』

「だらうな」

僕は幾分軽蔑した眼差しで彼女を見る。二百年前という江戸時代だ。随分長く幽霊やってるよな。

『あの、お願いです。私を見て怖がってもらえませんか？』

「は？」

『幽霊が見える人は少なくて、たまに見えたとしても誰も怖がってくれないんです』

「だって、恐くねえもん」

幽霊だけにしつこいのは分かるけど、僕はちよつと苛ついてきた。『困るんです……私もそろそろ成仏したくて、神様にお願いしているのですが、自分で自分の身をあやめた物は、成仏させてもらえないのです』

「しょうがねえじゃん、自分でやったことだろ？」

『そんな……』

幽霊はシクシクと泣き出した。

『私だって、死にたくて死んだ訳じゃありません……家が貧しくて貧しくて、私が死ねば少しは家族がひもじい思いをしなくなると思い、命を絶ったのです……』

「はぁ……」

そんなこと言われてもなあ。当時は今と違って苦勞も多かったって思っけれど……。

『神様は約束してくださいました。もし、私が誰かをものすごく怖がらせることが出来たら、成仏させてやろうと』

「えっ？ 神様が？」

神様もいい加減なこと言うよな……。僕が呆れていると、幽霊はススツと僕の方に迫ってくる。

『だから、お願いです！ 私を見て怖がってください！』

幽霊は必死に懇願する。お岩さんみたいに顔の一部がつぶれているとか、口裂け女みたいな口をしているとか、のっぺらぼうとかろくろく首とかだったら、少しは恐いかもしれない。でも、彼女普通の顔してるし……。幽霊特有の青白い顔をしているけれど、生きていた時は割と美人だったかも。

「はあ、けど、恐くないんだよね」

僕は思ったままを口にする。それを聞いて、幽霊はまた声をあげて泣き出す。その泣き方がとても辛そうで、僕は少しだけ、幽霊に同情してきた。

「……じゃ、怖がってやるよ。驚きやいいんだろ」

「本当ですか？……」

幽霊は泣くのをやめ、僕をじっと見つめる。

怖がってやるよ。これも幽霊助けた。僕は幽霊を凝視すると、『ワッ！』と叫んだ。自分でもわざとらしいと感じた。僕には俳優の素質はないらしい。

『……』

幽霊は恨めしそうな目をして僕を見つめる。

『ダメです……本気で怖がってくれないと』

「無理」

僕はフーとため息をつく。どこをどう見りや恐いって言うんだ？人間の死体の方がよっぽど恐いぞ。僕は、じつくりと幽霊を見つめる。

と、柳の枝が風に揺れ、僕の方へなびく。しなっとした感触が首に走り、僕は手で首を触る。すると、何かが地面に落ちてきた。

「ギャーッ!!」

巨大な毛虫が、僕の首から地面に落ちて動いている。毒々しいオレンジと黒の毛虫がもぞもぞと地面を這う。僕は恐ろしさのあまり、もう一度凄まじい悲鳴を上げていた。

『……あ、ありがとう』

怖がる僕を後目に、幽霊は微かに微笑む。そして、ゆっくりと僕にお辞儀をすると、スッと消えていった。

僕の毛虫嫌いのお陰で、あの幽霊は成仏出来たようだ。良いことをした、と思いつつも僕は毛虫から逃れるために、一目散にその場を走り去って行った。幽霊よりも、僕は毛虫が怖い！ 完

（後書き）

「夏のホラー特集」として出そうかと思ってたんですが、全然ホラーじゃなくて…ジャンルホラーには出来そうもなかったので（^^；）、個人で投稿しました。

怖いものも、人それぞれ…。でも、毒々しい毛虫にはご注意ください！
じんましんで、ものすごいことになる場合もあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8104a/>

恐くない幽霊

2010年10月9日09時30分発行